

スケープゴートとしての魔女

— 上下二方向からの魔女狩り —

岡 本 博 太

1. はじめに

1573年のある月曜日、自らの告白のもと、被告は悪魔との姦淫と魔術を行使したことにより、[悪魔のもとに迎えるという] 喜びの声を上げながら火刑に処された¹。

これは、アンナ・ベーリンガーというノルドハウゼンに暮らしていた女性の裁判調書の最後に記された記述である。そしてこの女性を火刑に処した裁判こそ、ほかならぬ魔女裁判であった。魔女はアニメや童話の中だけに登場する空想上の人物であると考えられがちであるが、近代初期のヨーロッパにおいて魔女は実在したのである。しかもその数は数万人とも数十万人ともいわれ、それに合わせて上のような魔女裁判が数多くなされ、そうした魔女裁判のもとで実際に多くの魔女が処刑されたのであった。

この、近代初期ヨーロッパに嵐のごとく吹き荒れた魔女狩りが最も数多く、また残酷な形でおこなわれたのがドイツである。ドイツの魔女狩りは、ヨーロッパにおいて初めて「魔女」という語がその文献で言及されたスイスや、中世ヨーロッパ中でその残酷さをもって恐れられた宗教裁判所のあったスペインのそれよりもはるかに激しいものだったのである。この理由はいったいどこに起因するのだろうか。その原因を探る上で重要になってくるのが、国によってそれぞれ魔女狩りが異なるあらわれ方をしているということであろう。たとえばイギリスでも同様に魔女の概念は人びとの中に存在し、実際に処刑もおこなわれているものの、その件数は他のヨーロッパ諸国と比べると圧倒的に少なく、またその処

1 Löblich, Eberhard: *Hexenleben*. Halle: Mitteldeutscher, 2001, S. 40.

刑方法も火刑ではなく絞首刑が大半であった。

魔女狩りはヨーロッパ全体に広がった事象であるとはいうものの、その規模やあらわれ方はけっして同一ではなく、国によって様々だったのである。そして当然ドイツの魔女狩りにもいくつかの特異性があるわけであるが、そのひとつとして挙げられるのが、キリスト教権力主導による「上からの魔女狩り」と、民衆主導による「下からの魔女狩り」という上下二方向からの魔女狩りが存在したということである。そこで本稿ではこうした上下二方向からの魔女狩りについてそれぞれ考察を試み、それによってこのドイツが魔女狩り最多発国であったという事実の原因解明の可能性を示すとともに、魔女狩りとはいかなるものであったのか、今一度再考することを目的としたい。

2. 魔女と魔女狩り

ではまず始めに、魔女と魔女狩りについて概観してみたい。そもそも魔女とはいったい何者なのだろう。過去から今日に至るまで、魔女をモチーフにしたアニメがいくつも存在するが、そうしたアニメに登場するような愛らしい存在だったのであるか。それとも、グリム童話の『ヨリンデとヨリングル』(Jorinde und Joringel, KHM69)に登場するような、「背中の曲がった、肌は黄ばんで、やせこけ、大きな赤い目とあごまで届く曲がった鼻を持ったおばあさん」²のような存在だったのであるか。

答えはそのどちらでもない。実際に魔女として処刑されたのは、アニメや童話の中に登場するような、極端に愛らしかったり、または極端に醜かたりする存在などではなく、どこにでもいるごく一般の人びとであった。巷間に暮らすこれといって特徴を持たない普通の人びとが魔女とされ、そして処刑されたのである。それは言い換えれば自分の友人、知人、隣人、さらには親や子までもが魔女として処刑される可能性を十分持っていたということであり、また実際にそうした人びとが処刑されていったのである。

2 Grimm, Jacob/Grimm, Wilhelm: *Kinder- und Hausmärchen*. Bd. 1. Stuttgart: Philipp Reclam jun, 1993, S. 365.

しかし、このような魔女の存在は、今日ではアニメや童話の中だけの存在であり、実在すると考える者はまずいない。それは今日だけのことでなく、魔女狩りが終息に向かっていた1700年にはすでに、ヒルデスハイムにおいて窃盗罪で捕まったマルガレーテ・ヴィンケルマンという女性が悪魔に身を捧げたと自白したが、裁判所は医師に鑑定を依頼、彼女を虚偽の罪を犯したとして断罪している。ではなぜ、魔女狩り全盛期にはそうした魔女の存在が信じられ、また実際に処刑がおこなわれるまでに至ったのであろうか。そこには魔女裁判のおぞましいメカニズムが存在していた。

その基盤となったのはキリスト教権力による、特異な尋問と処刑の方法であった。彼らは被告に対し、二種類の尋問を用意した。ひとつは「拷問を伴わない尋問」、もうひとつは「拷問を伴う尋問」であった。「拷問を伴わない尋問」では、実際に拷問をおこなうことはせず、被告の前に拷問器具を並べ、その器具ひとつひとつについての詳細な説明をおこなった。また、三流の舞台役者を隣の部屋に用意し、彼らに悲鳴を上げる芝居をもさせていたという。そうすることで被告の恐怖心を煽り、自分たちの望む供述を得ようとしたのである。しかし、この「拷問を伴わない尋問」に屈しなかった被告には、次に「拷問を伴う尋問」が待っていた。その内容は、指ねじによる指の締め上げ、水責め、爪剥ぎなど、想像を絶する残酷さを持つものばかりであり、大半の人びとは、この「拷問を伴う尋問」に屈する形で尋問執行者たちから求められた模範的自白をしたのであった³。

それではなぜ被告たちはそうした自白をできるだけ魔女に関する知識を持っていたのだろうか。被告の中には上流階級の人びともいたが、その大半は下層に暮らす一般の人びとであった。1485年に出版された、魔女の悪行を列挙したかの悪名高い『魔女の鉄槌』(Malleus maleficarum)をはじめ、当時既に数多くの魔女関連の書物が出版されているが、当時の知的環境を考えると、下層に暮らす一般の人びとが文字を読めたはずもなく、そうした書物を読んでいたとは考えにくい。ここで考えられるのは、処刑時の判決文の読み上げによる魔女概念の普及である。基本

3 Vgl. Löblich, Eberhard 2001, S. 35-41.

的に尋問は非公開で秘密裏におこなわれたが、最終判決だけは公の場でおこなわれた。そしてそこには数多くの観衆が集まり、その判決を、そして被告の処刑を見守っていた。

当時、こうした処刑は一種の祭りの様相を呈していたといわれているが、『白雪姫』(Sneewittchen, KHM53)においてもそうした処刑という凄惨なものが一種の娯楽であったことを窺い知ることができる一節がある。「お后はいやおうなく真っ赤に焼けている靴を履かされ、踊り続けているうちに、とうとう地面に倒れて死んでしまいました」⁴。これは物語の最後の場面だが、焼けた靴を履かされ、まるで踊っているかのようにその熱さに悶えながら死んでいくというこの処刑の光景は想像するに耐えない恐ろしさを持ったものである。しかしそれ以上に恐ろしいのは、この処刑が結婚式の真最中におこなわれたということである。言い換えれば、盛大な結婚式のひとつの余興としてこの処刑はおこなわれたのである。

こうした見世物的要素を持った処刑の前には、必ずその被告に関する判決文が読み上げられた。もちろん拷問の事実などはそこには記載されておらず、被告は自らの良心の呵責に耐え切れずに罪を自白したものとされた。こうした偽りの判決文は人びとに魔女の概念を植え付け、そうした魔女概念はいやおうなく生活の中に入り込み、あらゆる恐怖と猜疑心とが人びとの周りを駆け巡った。何かあるたびに人びとは自分の周りの人びとを魔女ではないかと疑い、その疑いは噂となって共同体中を流れた。そしてそのような噂をたてられた人びとは当局によって逮捕され、上のような尋問を経て処刑台の塵となり、その被告の公開判決を聞いた人びとにはさらなる魔女概念の強化がもたらされたのであった。

こうしたメカニズムによって、ヨーロッパ全体で10万人ともいわれる人びとの命が無実のもとで失われていったのである。このような魔女妄想とそれに伴う魔女狩りは、近代初期のヨーロッパの広大な地域を席卷していったわけであるが、その中でも最も激しい魔女狩りの嵐が吹き荒れたのがドイツであった。その件数においても、また拷問と処刑の残酷さにおいても。

4 Grimm, Jacob/Grimm, Wilhelm 1993, Bd. 1. S. 278.

3. 上からの魔女狩り — キリスト教権力による魔女狩り —

魔女狩り時代における魔女の定義については多くのキリスト教悪魔学者たちがその著書の中で挙げているが⁵、それぞれ表現は違えども、総じて、悪魔と契約を結んでキリスト教を棄て、悪魔の術に助けられて他人に害悪を加える者というものであった。(後になると、他者に害悪を加えることよりも、自らの意志で悪魔と契約を結んだという精神的な罪に何よりも重点が置かれるようになっていく。)

こうした魔女の定義からはふたつの問題が浮かび上がってくる。ひとつはなぜキリスト教が率先して魔女狩りをおこなったのかという問題である。これはその当時の、人びとのキリスト教信仰の変化が原因であった。魔女狩りの時代というのは、キリスト教危機の時代でもあった。天候不順による農作物の不作やそれに伴う飢饉や疫病、また度重なる十字軍遠征の失敗や宗教改革などによって、当時の人びとの間には終末思想が広がり、それに合わせてキリスト教への不信感が少しずつ蔓延していたのである。

こうした事態の打開のためにキリスト教権力が持ち出したのが魔女狩りであった。魔女狩りによって人びとのキリスト教に対する不信の目をそらし、またそれに加え、率先して魔女狩りをおこなうことによって権力を回復しようとも試みたのである。つまり、魔女とはキリスト教の宗教危機を乗り切るために作り出されたスケープゴートだったのである。

そして、こうした考えをカトリックの側もプロテスタントの側も持っていたことが魔女狩りに拍車をかける結果となっていく⁶。カトリックとプロテスタントが互いを「反キリスト」や「悪魔」といって罵り、攻撃した宗教改革の波紋は、様々な政治的利害と結びつきながら、三十年戦争に至るまで続いたわけであるが、ここで相手を攻撃するためのひとつ

5 「悪魔と結託することによって、おのれの目的を遂げようとする者」(ジャン・ボダン『悪魔崇拜』)、「悪魔と同盟を結び、悪魔の助けを利用して不可思議なことを行うことに同意する者」(W・パーキンス『妖術論』)など。

6 Vgl. Trevor-Roper, H. R.: *Religion the Reformation and Social Change*. London: Macmillan, 1967, S. 90-192.

の手段として魔女狩りが用いられた。互いに自らの正当性を主張すべく、互いをスケープゴートの対象としたのである。こうしたカトリックとプロテスタントの確執は、主として北西ヨーロッパに深刻な対立を引き起こした。そして、この時期に魔女狩りが最も激しくおこなわれたのがまさにこの北西ヨーロッパであり、その中でも対立の激しかったドイツでは数多くの魔女狩りがおこなわれたのである。ドイツ最後の魔女狩り犠牲者は1775年にアルゴイ地方で処刑されたアンナ・マリア・シュヴェーゲリンとされるが、このアルゴイ地方もまた、ルターの宗教改革と反宗教改革の対立の激しい地域であった。

次にもうひとつの問題であるが、それは魔女が契約を結んだといわれる悪魔とはいったい何者なのかということである。この問題はキリスト教布教の時代にまで遡る。ここでいう悪魔とは、他ならぬキリスト教以前の人びとが信仰した多神教の神々であった。キリスト教権力はその布教の手段のひとつとして、そうした神々を異端の神、すなわち悪魔として捉え、それらを攻撃対象とすることでその教えを広めていくという方法をとったのである。他のヨーロッパ諸国に比べ、ドイツではキリスト教が広まるのに時間を要したが、これはゲルマン信仰における多神教の神々の存在が人びとの心に強く根付いていたことが大きな原因であった。

こうした布教活動が魔女のプロトタイプを生み出し、また魔女狩りを拡大させる要因となっていく。それは、キリスト教が悪魔と見なしたゲルマンの神々の大半が森を属性に持つ神であったことに起因する。ゲルマン信仰における森は人間の生命を育む聖なるものであり、人びとは畏怖と敬愛を森に対して抱いていたのである。しかし、キリスト教にとって森は支配すべき存在であり、異教の神、すなわち悪魔が属性として持つ、徹底的に排除すべき存在だったのである。8世紀中頃、ベネディクト会修道士ボンファティウスが雷神トールの宿るとされたミズナラの木を切り倒し、その木で十字架を作ったという逸話は、キリスト教の森林観と、その布教がいかんしておこなわれていたかを教えてくれる。

こうしたキリスト教の森に対する概念は中世以降の都市の形成とその拡大に伴い、より大きな意味を持つようになっていく。都市の形成は人びとに、自分たちの暮らすミクロコスモスと、その外部としてのマクロコスモスという二極の空間概念をもたらした。都市に暮らす人びとにと

って森は未知なるマクロコスモスとしての存在となり、また加えて、自分たちの都市拡大を妨げる敵としての存在となっていく。つまり、都市の形成とその拡大を通じて、それまでの畏怖と敬愛に満ちた森に対する概念は、恐怖と敵意に満ちたものへと変容していったのである。

こうした過程を経て、魔女のひとつのプロトタイプが形成されていった。魔女狩りの犠牲者の中には薬草の知識に精通した女性や、水車小屋で働く人々が数多く存在したが、こうした人びとは他の人びとと比べ、森というマクロコスモスとの接点を多分に持つ人びとでもあった。薬草を摘みに森に出かける女性や、森の中の水車小屋で働く労働者。彼らは人びとにとって、自分たちの知らないマクロコスモスの世界に通じる怪しげな存在と映ったのである。そして、そうした異界と通じる人びとは魔女とされ、迫害されていく運命を辿ったのであった。

こうした異界と通じていることが魔女とされる大きな要因であったことは、「魔女」を示すドイツ語である「Hexe」の語源からも明らかとなる。この語の語源は諸説存在するが、そのうちの一つに中高ドイツ語の「hagazussa」(hagは垣根、zussaは女性の意)に由来するというものがある。この説に依拠すれば、魔女とはつまり「垣根を越える女」だったのである⁷。この垣根とは、都市や村共同体と野生の境界線でもあったと考えられる。つまり、ミクロコスモスとマクロコスモスを意のままに往来できるものこそ、魔女だとされたのであった。

グリム童話に登場する魔女はそのほとんどが森を住処としているが、これは単なる偶然ではなく、キリスト教主導による魔女狩りがもたらした必然の産物だったのである。「森がなければドイツはドイツではないと言っても過言ではないように、ドイツ人にとって森は欠くことのできないもの」⁸だと言われるように、ドイツにおいて森は非常に重要な存在であり、それはアニミズム信仰のゲルマンの時代から、環境先進国といわれる今日まで変わっていないが、こうした森との深い関係が、ドイツにおいて激しい魔女狩りがおこなわれる一因となってしまったのである。

7 Vgl. Löblich, Eberhard 2001, S. 31.

8 高橋義人『ドイツ人のこころ』、岩波書店、2001年、178ページ。

4. 下からの魔女狩り ― 民衆による魔女狩り ―

1657年、マルガレーテ・ミュラーという一人の女性が魔女として処刑された。彼女は隣人の家の牛を病気にして牛乳を取れなくさせる牛乳魔女として告訴、処刑されたのであるが、彼女が魔女として処刑された背景には、その容疑とは別に重要な意味が潜んでいる。それは、彼女が異なる共同体からやってきた移住者だったということである。マルガレーテ・ミュラーはヘッセン国ヴォメン村の出身であったが、結婚し、チューリンゲン国ノイシュタットに嫁いで来た。ノイシュタットの人びとにとって、生まれもつての共同体構成員ではない彼女は「よそ者」であり、それゆえ彼女のことを快く思わない人びとがいたのである。つまり、彼女にははじめに「よそ者」としての否定的な位置づけがあり、その上に魔女としての属性を付加させられたのである。

この件の中に宗教的要素は見出せないが、そのような例は他にも数多く見ることができる。マールブルクのカタリーナ・シュタウディングーの一件もそのひとつである。彼女もまた、魔女の嫌疑がかけられた女性であるが、それは隣人の告発によるものであった。ある年、シュタウディングー家ではたくさんのバターができたのに対し、隣人はバター作りに失敗し続けていた。隣人はこれをカタリーナが自分の家の牛に魔術をかけたせいだとして訴えたのである。

これらの中に共通してあらわれているのは、共同体内における諸問題を魔女狩りによって処理するというシステムであり、それはキリスト教権力主導の魔女狩りとはまったく異なる性質を持つものである。つまり、ドイツではキリスト教権力主導のものとは別に、民衆の側からの魔女狩りも存在したのである。魔女狩りが行われた件数を年ごとに算出した表⁹を見てみると、天候不順で農作物が不作だった年や疫病が流行した年と、魔女狩りが多発した年がほぼ一致していることが見て取れるが、これなどもそうした民衆による魔女狩りのパターンがはっきりと存在したことの証左となるであろう。

こうした民衆主導の魔女狩りが発生した背景には共同体社会という社

9 牟田和男 『魔女裁判』、吉川弘文館、2000年、115ページ参照。

会体制があった。共同体社会であるということは生活圏の狭さをも意味する。そうした狭い共同体内では、人びとは互いに相手の人格について知っているだけに留まらず、職業や生活習慣、さらには経済状況に至るまで、すべてを知っているという状態になる。つまり、共同体内のことは誰もが皆のことをすべて知っているという状況が生まれるのである。そうした中でひとたび噂が流れると、その噂は恐ろしいスピードで共同体中に伝わるであろうし、また、一度魔女だとされるとそのときは釈放されたとしても、その後も繰り返し同様の告発がおこなわれるということがたびたび起こったのもそうしたことの結果であろう。

また、こうした共同体内での魔女狩りを生むひとつの概念が当時の人びとの間にあったことも看過できない。それは、共同体内の財は常に一定であるという概念である。財の総量は不変のものであり、仮に自分の家の収入が減ったとしたら、それは共同体内の誰かが自分の家の財を奪ったからだと考えられた。だから、自分の畑での収穫が少なかったりした場合には、収穫の多い家の人が自分の収穫分を魔術によって奪ったのだと考えるということが一般的におこなわれていたのである。上記のカタリーナ・シュタウディングーの一件などは、まさにこの好例であろう。

さらに、領邦国家であったことも「下からの魔女狩り」が発生した原因として挙げられるであろう。隣国フランスが徹底した中央集権のもとでその勢力を拡大していったのとは異なり、当時のドイツが300以上の領邦からなる領邦国家であったことはよく知られているが、領邦国家であるということ、それはすなわち社会が不安定な状況であったことにほかならない。領主たちの睨み合いが続き、些細なことで争いが起きる。しかし、そうした争いに仲介に入るべき中央権力も存在しない社会。そうした中で生きていくためには、自らの手で自らの共同体を守っていかなければならない。そのためには共同体内で起きた問題は、たとえそれが天災などの不可解なものであっても必ず原因を求め、解決しなければならず、そうした問題解決の手段として、魔女狩りが利用されたのである。「委員会」なる組織の存在はこの事実を如実にあらわしたものであるといえよう。それが結果として共同体の中に恐怖と猜疑心を生み、逆に共同体内の混乱を生じさせることになるなど徹塵も考えずに。

当然こうした民衆の動きに歯止めをかけようと、魔女狩りを封じた領

邦もあった。しかしそれとは逆に、自分の許認可権限を誇示するため、積極的に魔女狩りをおこなった領主が支配する領邦も存在した。このように、地域によって魔女狩りの発生件数の格差が非常に大きいこともまた、ドイツの魔女狩りが持つ特異性であった。

5. おわりに

魔女として処刑された人びとの大半は何の罪も犯していない無実の人びとであった。中には窃盗犯などもいたが、そのほとんどは火刑にされるほどの罪を犯したわけではなかった。つまり、魔女とは罪を犯した存在などではなく、社会の不安定状況を静めるためのスケープゴートだったのである。キリスト教権力はその宗教危機を回避するために、また民衆は自分たちの生きる共同体の安定のために魔女を作り出し、生け贄にしたのである。自分たちの安定が得られるのであれば他者が犠牲となることも厭わない、こうした歪んだエゴイズムこそが魔女狩りの本質なのである。

そして、そうした忌まわしい妄想と行為とが様々な要素と結びつきながら拡大し、驚くべき数の犠牲者を生み出していったわけであるが、その様々な要素が数多く存在していたのが当時のドイツだったのである。豊かな森に囲まれ、その中で樹木信仰を中心とした多神教の概念を育んできた歴史を持っていたがゆえに、また領邦国家という社会体制を有していたがゆえに、ドイツでは上下二方向からの激しい魔女狩りがおこなわれ、結果として魔女狩り最多発国となったのである。

本稿ではそうした二方向の魔女狩りそれぞれに焦点を当てて論じたわけであるが、ドイツが魔女狩り最多発国となった背景にはその他にも様々な要因が求められるはずであり、そのため、この問題の原因解明には複眼的な視野が必要となることは論を待たない。加えて、本稿における二方向からの魔女狩りに関するそれぞれの考察も決して十分なものではないが、本稿ではその可能性の示唆を目的としたことをあらためてここで述べておきたい。

最後に、こうした魔女狩りという誤った信仰と妄想、そしてそれによる残酷な弾圧に対し、1631年に『裁判官への警告、または魔女裁判について』という論文を著すというかたちで、反対の意を唱えた最初の権威

スケープゴートとしての魔女

ある立場の人物が、フリードリヒ・フォン・シュペーという、「ドイツ」のイエズス会修道士であったことをここに記し、本稿の結びとしたい。